

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



池田 誠一

【3】城下町の誕生…中世から近世へ

1 「惣構え」の城

城は、戦国時代に大きく発展しました。一口に城といっても、戦国時代の始めと終わりではその形態も大きく変化しています。たとえば犬山城の絵図を見てください(図1)。上のほうに城郭が見られますが、その下の城下町の部分にも堀があるのが分かります。右、下、左と城下町を取り巻いています。これは、

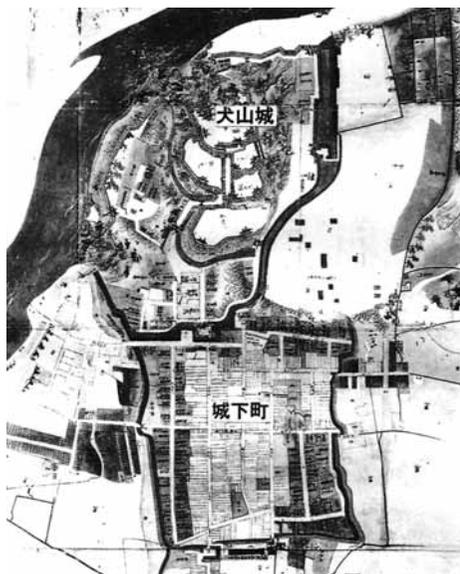


図1 犬山城下絵図(1791)。
下の部分に城下町を囲む堀が見える

前にみた清須城もそうでしたが、城下町の周りを堀で囲って門を作った、いわゆる「惣構え」と呼ばれる形式です。

名古屋城には見られないこの堀ですが、この付近の岡崎城、西尾城、岐阜城等の城は、皆この惣構えの堀があったのです。これは全国的な傾向で、秀吉の造った大坂城も、家康の造った江戸城も惣構えでした。城や城下は、時代とともに形を大きく変えていました。

今回は、名古屋城や城下町の歴史上のポジションを見ておくため、時代と共に変遷した城と町を考えてみたいと思います。

2 城と町の変遷

(1) 中世の城…要害の山城

城は、古くは「き」と呼ばれ、古代から防衛のための施設として造られてきました。大宰府の国防上の水城(みずき)、東北での蝦夷攻防戦の城柵などが有名です。

そして中世、武士の時代になると一気に増加します。とくに南北朝から室町時代にかけて。始めは武士居住の館が、堀、土塁、柵等で強化される程度でした。が、下克上の戦国時代になるとともに城は要害堅固な山地や水辺が選ばれるようになりました。未だ地方の豪族が割拠していた時代で、全国には何千といわれる多くの城が築されました。名古屋市

内でも、この頃の、城、屋敷、砦と呼ばれる城跡は、100箇所近くになります(文献①)。このように戦国時代は、初めは「山城」が多く、城は防御のための施設だったといえます。

(2) 城下町の誕生…平山城の時代

16世紀の中頃、戦国時代が最盛期を迎える地域は戦国大名への統合が進み、城も分散から統合に向かって大型化します。そして、兵器や兵糧の確保、さらには国の流通経済を押しやるためにも、城は商人や職人を必要とするようになりました。これまで分かれていた城と市(いち)が統合していくことになったのです。また家臣団も、徐々に城下への集住が進みました。

これらのことが城の形を変化させました。一つは、この家臣団や商人・職人を守るためにその外側を堀で囲み、出入口に門が作られたことです。これが始めに紹介した「惣構え」という城になります。いわば、城と家臣や町人は運命共同体になったといえます。このような惣構えの形式は寺内町などにも見られます。外国で言う「都市の城壁」が日本にもあったのです。そしてその有効性が示されたのは1590年の秀吉の小田原攻めで、惣構えの城は参加した諸将によって全国に広まりました。秀吉も築城中だった大坂城を惣構えに変更しています。

いま一つの変化は、城下町の誕生です。家臣団や町人の集住は、城下に町をつくりました。はじめは惣構えの中が中心でしたが、次第にその周辺にも町人が集まってくるようになりました。そして新しい城になると、計画的に町が造られることになったのです。この形式で古いのは越前朝倉氏の一乗谷城が有名です。しかし1563年、信長が造った小牧城には、その後につながった先進的な城下町計画を見ることができます。

城は、これらの変化によって、築城される場所も変ることになりました。多くの人々が住み、市と近づくために、山の麓の平坦地と接する所です。信長の築いた小牧、岐阜、安土の城はその典型でしょう。この時期は、城は山、町は下、と分離された、いわゆる「平山城」とされる城が多く造られました。城の役割も防御と兵站的な機能とを両立することが求められるようになったのです。

(3) 近世の城下町へ…計画された町

秀吉の天下統一から関ヶ原戦の頃になると、城はもう一つ変ることになりました。それは信長、秀吉、家康やその家臣による領国化の進展でしょう。戦国の世の安定化とともに、各大名はその国を治めるということに重点が置かれるようになりました。

城は、再び、これまでの山際から離れて交通の便の良い街道や河海の近くに立地するようになりました。この移動を先進的に行ったのが秀吉です。秀吉は信長から近江3郡の領地を与えられました。1576年、彼は名城とされた山際の小谷城を捨てて琵琶湖岸を選び、長浜城を造りました。湖岸の平坦地は当然防御には不向きでしたが、堀をめぐらして固めました。そして湊を造るとともに、陸側に城下町を計画的に造ったのです(図2)。攻めの



図2 長浜城の概要。

琵琶湖に浮かぶ城の東側に整然とした城下町が造られていた

戦いをする秀吉にとって、物資を動かしやすい湖岸、北国街道の通る城下こそが大切でした。そしてこの思想は、彼の出世もあって全国に広まっていくことになりました。

城は、領国支配に便利な平地が選ばれる「平城」の時代になりました。新しく築城される城は、平野の真ん中に、そして城下町も計画的に造られることになったのです。

3 絶行 小牧山城と城下町

… 発見された町の跡 …

信長は、尾張の国をほぼ統一すると、美濃攻めに向けて清須の東北の小牧に築城しました。しかし僅か4年で岐阜城に移ったため、その城下のことは、これまであまり探求されていませんでした。しかし近年、立派な、計

図3 小牧の城下町。西が町人の町。東が武士の屋敷地になっていた



画的な城下町があったことが分かってきたのです(図3)。今回はこの城下町の先進事例、小牧の城と街を訪ねてみたいと思います。

〈小牧山城へ〉

名鉄小牧線の小牧駅の西口を出て、駅前広場の南側の広い通りを西に進みます。小牧は、江戸時代は藩の木曾街道の宿場でした。右にある大きなスーパーの前は、その街道が鍵の手に曲る所です。正面には小牧城が望めます。しばらく進むと川に突き当たります。これ



小牧山の上に、新しい天守閣(歴史館)が見える



山麓にある信長の館跡と推定される曲輪



天守閣から城下町跡を見る



発掘中の天守台の石垣

は江戸時代に掘削された木津用水(合瀬川)です。左に曲って川沿いに進み、次の橋を渡った所に信長時代の城の曲輪が復元されています。南側に進むと広い通りの北側には、信長の時代の遺跡のうえに小牧長久手戦の土塁が築かれたという説明板があります。

通りを少し西に行った斜めの登山道に入り、公園の向こうの大手道を右に、階段を上ります。上り始めてすぐ、右に入る道が天守への旧道です。S字型の急坂を上ると3層の新天守閣があります。登れば濃尾平野が一望でき、南側にはこれから訪ねる城下町跡が見えます。

天守閣を出て下り始めを右に廻ると、天守台の西側では石垣を発掘中です。信長の城の石垣としては最も古いものとされます。西に下り、曲輪跡を見ながら左に廻って大手道に戻ります。そのまますすぐと下ると市役所の隣で広い通りに出ます。

〈城下町跡から〉

通りを渡ると市南庁舎です。西の駐車場では城下の遺跡を調査中です。その西側の道が城下の中心の南北の道になります。南に一本目の道から先が町人の町とされる区画で、長方形の街区と短冊状の宅地跡がありました。東西に油屋筋、その先は南北に新町筋等となっています。しかし南に進んでも区画整理中で、城下町跡という感じはありません。

城下町は、およそ1.0[㊦]、南北1.3[㊦]あり、



城下町の中から城を振り返る。
すっかり住宅地になっている



木曾街道に残る脇本陣の岸田家。
この左手に藩の小牧御殿(後に代官所)があった

南側、国道を越えた辺りまで行くと、南端の惣構えの土塁と堀もありました。今はその跡が用水になり、神社には土塁跡もあるようです。しかしかなり遠く、途中何も無いので省略して右にレストランのある所で左に曲りましょう。この道の南側も京町筋とされていますが、その痕跡はなさそうです。突き当たりは、史跡発掘のきっかけになった新しい小牧中学です。北に曲り、突き当たりを右に曲ります。この東西の道は、清須と小牧を結びさらに犬山方面へと伸びる道でした。

城下町跡と別れて川を渡り、旧道を進みます。広い道に出て東に進むと、3つ目の信号が木曾街道の小牧宿の通りです。東北の角には江崎家の本陣跡の碑があり、南100m程度の所には脇本陣の岸田家が残ります。街道を北に進み、突き当たりを

右に曲ると、往路に通った広い道で、小牧駅へと続いています。

4 江戸城の惣構え

戦国時代の際に、城は山上から平地に移り、新しく城下町が生まれました。経済は活性化し、平和の時代も近づきました。しかし近世の城や町になるには、未だ古い戦争対策を残していました。その一つが「惣構え」です。

戦国時代の後半に普及した惣構え。信長は安土城を惣構えにし、秀吉も大坂城を惣構えにしました。そして家康も江戸城を惣構えにしたのです。江戸城は太田道灌が造った城に改造を重ねて幕府の拠点にしました。惣構えも東西、南北が5³0×4³0という巨大なものでした(図4)。けれども建設の着手が1590年で、惣構えの完成はなんと1630年代です。江戸の街は、重い戦国を引きずっていました。

しかしながら、少し後の、名古屋城の築城が決まった1600年代の初めには、城も町も「近世」という時代の、新しい形が生まれつつあったのです。

〈主な参考文献〉

- ①愛知県教育委員会『中世城館跡調査報告1(尾張)』(1991、文化財図書刊行会)
- ②高橋他編『図集日本都市史』(1993、東京大学出版会)
- ③文化財研究員会『織田信長と小牧』(2009、小牧市教育委員会)
- ④内藤昌『江戸の町(上)巨大都市の誕生』(1982、草思社)

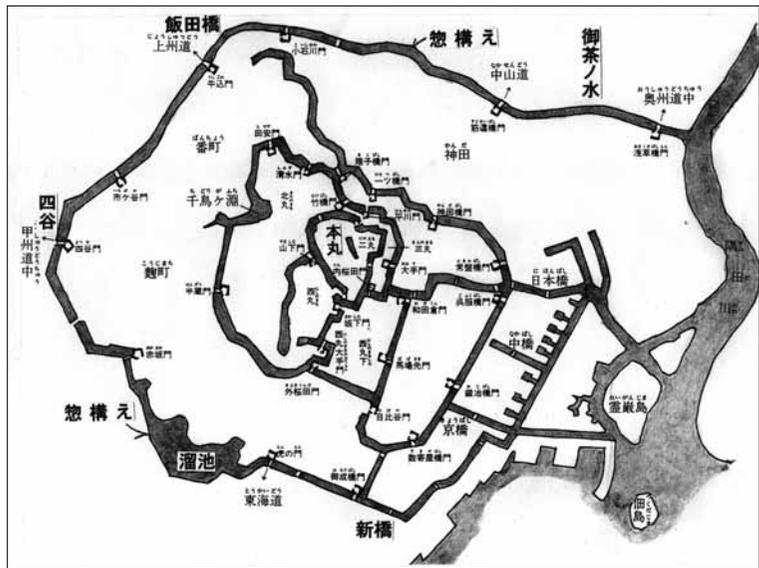


図4 江戸城の惣構え。今のJR中央線の所を廻り、四谷から虎の門、新橋を結んでいた